Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂の和学
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1954, 10, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68436
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

懐徳堂の和学

小島吉雄

わが大阪大学国文学研究室では、先年来文部省の科学研究費の補助を受けて、近世に於ける大阪和学の研究を続けてゐる。本特輯号は、その研究成果の一端である。

われわれの謂ふ和学とは、言ひかへれば日本古典学である。それを何故に特に和学と言ったかといふと、これは所謂国学と区別せむがためである。荷田春満から加茂真淵、更に本居宣長へと発展していった国学の古典研究の上に示した功績は実に大きく、かつその勢力は全国を風靡したものであるから、近世に於ける日本古典学は国学によって代表せられるが如き観があり、従って近世日本古典学即国学といふ風に、常識的には考へられ易い。しかし国学にはわが国固有の国民精神の本源を究明して、古道もしくは神ながらの道を宣揚しょうとする明確なイデオロギーがある。そして、仏教とか儒教とかの外来思想を排斥し拒否する偏執を持ってゐる。ところが、契沖の学風などには、さういふ国学的なイデオロギーが強く出てゐない。儒教をも仏教をも必要とあらば進んでこれを利用するのであって、国学に見るが如き排他的な点がない。国学も近世日本古典学の一つの在り方であるけれども、契沖の如きもまた近世日本古典学の一つの姿である。われわれがここに和学といふ言葉を使用するのは、国学的性格を帯びざる契沖の日本古典学の如きを所謂国学から差別づけるためであって、同時にこれを以て国学をも含めた種々の学風を有する日本古典学の総称ともしょうとするのである。

ところで、われわれの研究は、近世に於ける大阪和学の研究であるが、われわれの第一に着手しょうとすることは、近世の大阪に於ける和学の資料の蒐集調査とその整理とにある。これは、近年、資料が埋没もしくは散佚の傾向にあるから、研究のためにはその研究資料の蒐集整理からはじめる必要を感じたためであり、また、今日存してゐる資料も現在の如き混乱した世相にあっては、近き将来に於ていん滅しかねないおそれがあるから、今のうちにこれが保存と整理とに努めることの必要にして喫緊事たるを感じたからである。そこで、まづ、大阪の和学者の編著書や遺稿の類の調査と蒐集とに力を致したのであるが、さて、事をはじめようとすると、第一に迷ったことは、大阪の和学者の範囲をどの程度に定めるかであった。大阪人物誌等には一時的な滞在者をも含めた大阪在住者のすべてを列挙してゐるやうであるが、他国の人で一時大阪に滞在したに過ぎない人を大阪に生れ大阪で死んだ生粋

の大阪人と同列にあつかってよいものかどうか、たとへば、大隈言道とか黒沢翁満とか中島広足とかを大阪の人と言へるかどうかといふことになると、些か疑ひなきを得ない。大阪は諸国の寄合所だから、この著名人の一時的滞在者が甚だ多い。それを全部あげてゐたのでは、大変である。しかし、大阪生れでなくても、大阪に長く居住し、或は大阪に墓所を存していて、大阪人としてこれを遇してもよいかと思はれる人もすくなくない。契沖なども言はばそのうちの一人であるが、敷田年治だとか萩原広道だとかいふ人もまたこの部類に入れて差支へないであろう。また、大阪生れであるが、後半生を他国で送った上田秋成の如きもある。大阪生れで、大阪に居住し、大阪で死んだ生粋の大阪人の場合にはもちろん疑念はない。その他の場合は、これを大阪の学者とすべく、要するに程度の問題といふことになるのである。すなはちその程度をどこに置くか、われわれはこれに迷ったのである。また大阪人と言っても、旧大阪市内にこれを限るか、大阪府下出身者をも加へるか、さういふ点にもまた惑ひなきを得ない。大阪に於ける和学界の全貌を知るためには、網羅主義の方がよろしいのであるが、大阪独自の特色を探らんとするには、網羅主義でない方がよろしいのではないか。要するに焦点のおきどころが問題となるのである。結局、われわれは、まづ大阪人独自の和学を明らめることから始めようとして、疑義のない、大阪生れの大阪居住者の学問を検討することから出発したのである。そして、更に進んでその余力を以て、その範囲を拡大してゆかうと思ふのである。懐徳堂の和学は、すなはちその立場に立って最初に採りあげた課題であり、それに関する資料の調査も一通り纒まったので、その成果の一部を本号に公表する次第である。

一体、懐徳堂とは、大阪に於ける漢学塾である。一時は、東都の昌平黌に対抗するの実力をもった幕府公許の学問所であった。その沿革の詳細は、西村天囚著はすところの「懐徳堂考」（大正十四年十一月刊）について看られたいが、享保十一年に創して、明治維新に廃するまで、百四十四年、大阪の文教に貢献するところ大なるものがあったのである。

懐徳堂は、三宅万年にはじまる。万年は号をまた石庵とも言ったが、もと京都の生れ、元禄十三年大阪に来り、尼崎町二丁目に居を構へて、儒を講じた。大阪の富豪たちが門下生となった。享保九年の大火ののち、その年の十一月に尼崎町一丁目に門下生が相寄って万年のために懐徳堂を建てた。直門の中井甃庵が他の門弟と相謀って、これを官許の大阪学問所となさんとし、享保十一年つひにその目的を達した。ここに懐徳堂の規模が確立したのである。懐徳堂の学主は、三宅万年にはじまり、そのあとを門弟の中井甃庵が受け、甃庵ののちを万年の子の春楼が継いだ。この間に、大阪生粋の儒学者、五井蘭洲が助教としてその講学を助け、殊に甃庵の歿後は、懐徳堂の事実上の中心となってその学風を布き、甃庵の遺子、竹山、履軒の両人を薫陶して後年懐徳堂の名を天下に高からしめる基礎をきづいた。さて、三宅春楼の歿後は、甃庵の子の中井竹山が学主を継承し、竹山の弟の履軒がまた兄をたすけて懐徳堂の学業を天下に重からしめた。その後、竹山の子の蕉園は偉才であったが夭折し、蕉園の弟の碩果が学主となり、

碩果の歿後は、竹山の外孫の並河寒泉がそのあとを継ぎ、履軒の孫の桐園が碩果の養嗣子となって、寒泉をたすけ、相共に守成の功をなして、以て明治維新に至った。このやうに、懐徳堂は、萬年以来、代々漢学教授を以てその業としたものであるが、その門弟には、大阪の町人が多く、その中からは秀れた学者をも出してゐる。ところが、懐徳堂は、和学にも若干の業績を示してゐるのである。懐徳堂の漢学については既に天下の周知するところであるが、その和学については、纏って論述せられたるもののあるを知らない。

懐徳堂和学の中心は、五井蘭洲にある。蘭洲の和学は、主として父の持軒から受けてゐる。また、三輪執斎に影響せられるところもあったであろう。持軒は、元来朱子学者であるが、生粋の大阪人で、土着人としての近世最初の儒学者であった。「懐徳堂考」の語るところによると、五井の家はもと大和の出、持軒の祖父守香がその晩年に大阪に隠棲し、爾来大阪に住みついたのである。守香は和漢の学に長じ、詩歌を善くしたが、また節用集を著述し、日本紀の学を伝へたと言はれる。持軒はその守香の次子守純の次子であるが、祖父と同居してその庭訓を受け、家学を継承した。蘭洲の著述である「蘭洲茗話」には、次のやうなことがしるされてゐる。

「やまとの訓山外なるは、予が家伝来の説也。他家の説にいはぬ事也。先考かって貝原篤信と下河辺長流とにかたられし。篤信は釈名をつくりて己が説とし、長流は僧契沖にかたり、契沖代匠記をつくりて己が説とせり。」

と。この文中、先考といふのは持軒をさすのである。持軒と益軒とは京都遊学の時の同門であり、下河辺長流と持軒とはまた交遊があり、持軒は長流から万葉集や古今集について教を受け、和歌をも見てもらったりしたらしい。持軒の和学は、この「茗話」の文でもわかるやうに祖父伝来の家学を受け、傍ら、長流に学ぶところもあったと思はれるが、その伝来の家学には独自の見識があったらしいのである。蘭洲は、このやうな父をもち、その父の衣鉢をついだのである。加之、三十歳にして東上するや、三輪執斎のもとに手頼った。執斎は陽明学者であるが、同時に和学の造詣の深い人で、殊に和歌に秀でてをり、幾多の詠歌があり、家集もある。執斎は父の持軒の友人でもあり、また懐徳堂が学問所として公許せられるのに陰の人として大いに尽した人でもあったので蘭洲はこれに手頼ったわけであるが、この執斎の学風にもまた影響せられるところがあったであらう。前掲の「蘭洲茗話」にも、

「としを経て花のかがみとのうた、凡池は年をふるにしたがひて、うき草みさび生て、もののかげをうつさず、此池ばかりは幾としへても清潔なれば、春ことの花の鏡となり、遂にくもる事なし、唯花のちりかかる時をのみ、くもるといはんと也。すべて池を鏡にとりなしての趣向なりと、三輪子の物語に聞侍る」

とある。執斎にも説を聞いた片鱗をこれにも窺ふことが出来る。持軒には家伝の書や著書もあったのであらうが、すべて稿本として残ってゐたらしく、享保九年の大火の際に、悉く烏有に帰したといふ。今、その著の残るものもあるを聞かない。

蘭洲は、朱子学を奉じ、餘の学を好まなかった人であるが、そ

れでもその著書を通じてみるところでは、非常な博学であって、神道や仏学にもくはしく、弓術などにも深い造詣があったやうであり、和学の方にも数多くの著書を残してゐる。また和歌をも嗜み、新題百首和歌等が残ってゐる。蘭洲の和学に関する著書としては、萬葉集詁、源語詁、源語提要、古今通、勢語通の五部書の外に刪正日本書紀がある。「蘭洲茗話」は彼の随筆集であるが、その中には彼の学風や見識や、またその人となり等をうかがふべき文がすくなくない。

懐徳堂は堂規として、四書五経を講ずるを専らとし、かかる道義の書以外の雑書は一切講じない定めであったから、蘭洲ももちろん懐徳堂に於ては日本の古典書を講義するといふやうなことはなかったと思はれる。蘭洲の和学は、その業餘のわざである。しかも、この古典の講義を以て蘭洲は人倫の道を説きあかすことに役立てようと志してをる。そのことは、勢語通や源語提要をはじめ彼の著書の随所に見出し得ることである。蘭洲には正妻がなかった。一妾を置いて、それに一女を生ましめた。その女の名を「せつ」といふ。古今通や勢語通を見ると、これらはその一女のために著述する由が見える。その女の教養のために筆を執ったのである。蘭洲は、このやうに公に和書を講ずることをしなかった。しかし、その和学に関する著述は、忽ちその門下生の間に弘まり行はれた。その著を写し伝へるものも尠くなかったやうである。その和学を受けた門下生の中で、最も名をなしたものが、加藤景範である。景範は蘭洲の古今通を刪補した人である。

景範は、通称を小川屋喜太郎、のち友輔と改めた。大阪の折屋町に住んで薬種屋をしてゐた。父は信成といひ、儒医であったが、その家学を継いで、懐徳堂に学び、五井蘭洲の教を受けた。号を竹里（たかさと）といひ、歌道を以て一家を成した。歌は京都の松井政豊の弟子である。政豊は烏丸光栄の門人である。父の信成は光栄の門人であった。つまり、景範の歌学は、京都の堂上歌学の流れを受けてゐるわけであるが、しかし、その古典学は、必ずしも堂上の系譜を伝へてゐない。彼の自筆稿本である「新古今集旧注補遺」等を見ると、むしろ蘭洲の系統に属するやうで、古典考察の角度が全く蘭洲と一致してゐる。蘭洲は、さきに述べた如く、和学を以ておもて芸にするものではないが、景範は、和学を以て身を立て、和学によって門人をとった人である。景範の和学は、歌道を中心としてゐる。そして、甚だ雑学的傾向が強く、著書が非常に多い。また、その歌人としての傾向も著書に於ても、有賀長伯に類似するところが多い。長伯と景範とは直接交渉はなかったらしいが、森繁夫氏の「人物百談」によると、長伯の子の長因の大阪移住は、景範の奔走によったらしいといふ。長因の養子長収とは深い交渉があったらしく、懐徳堂文庫所蔵の「竹里書簡集」には長収との贈答の手紙が多数収められてゐる。のちに長収の女が景範の曾孫に嫁してゐるから、有賀家と景範とは、無縁の間柄でない。景範の歌学書はその数が多いが、就中、「国雅管窺」は彼の歌論学説を窺ふべき書として、最も重んずべきものである。「新古今集旧注補遺」については、拙著「新古今和歌集の研究」に詳しく紹介しておいた。

一体、昔の儒学者には国書歌書に精通し、かつ、すぐれた和文

を物す人が非常に多い。五井持軒父子が、和学に通じてゐたのもまた此の時代の風潮に従ったのであろう。懐徳堂の創始者三宅萬年も、中井甃庵も共にまた和学を好んだと言はれる。しかし、萬年にはその遺稿今に伝はるものもなく、懐徳堂伝存の「萬年先生遺墨帳」にその和歌俳句の片鱗をうかがひ得るのみ。甃庵には、「とはずかたり」、その他二三の遺稿があるが、和学に関する著述はない。和文に長じてゐるのを見ると、古典の教養が相当にあるものと思はれるが、学問的著述がない。

甃庵の子の竹山にも、和文の著書があるが、和学に関するものが見当らぬ。その著書目録の中に「萬葉假音」と題するものがある。未見の書であるが、その題名から考へるに、これは、萬葉仮名に関するものであらう。竹山は、加藤景範と友としてよかった。景範の蔵山集を編するや、その跋文を書するなどのことがあり、和歌の添削を景範に受けたといふこともある。景範の「美なれ佐保」といふ書物には、萬葉書きの仮名をいろは分けにして載せてゐるから、この竹山の著書も景範と何らかの関係があるのではないかと推察せられる。識者の示教をまつ。

竹山の弟の履軒には、「百首賛々」といふ著がある。明治二十五年、その後裔中井木菟麿によって活字飜刻せられ、博文館から発行せられてゐる。この書ののちに附せられた水哉館遺編目録によれば、履軒にはこのほかに「雕題伊勢物語二巻」「雕題古今和歌集二巻」がある由、未刊稿本である。「百首賛々」は、小倉百人一首の注釈書であるが、主として加茂真淵の説を批判反駁したもので、実に履軒一流のものである。履軒の和学はこれで見ると、蘭洲や景範の系統を引かず、彼独自のものである。しかも、和学に深い素養があるとも見えず、漢学者の素人考へともいふべき説が随処に見られる。しかし、多年の漢文読習による読解力を応用しての萬葉歌の解釈などには、その説の当否はさておき、その鋭い感受力には瞠目せざるを得ない。その文にもその説にも、履軒の人がらが濃く出てゐるところに特色がある。

さて、懐徳堂の和学には、蘭洲をはじめ、景範にも履軒らにも、共通する特色は、漢儒の眼を以てわが日本の古典を見ようとしてゐることである。蘭洲が伊勢物語の中に業平の誠実の心をあとづけようとし、源氏物語に勧善懲悪の作意をさぐらうとしたが如き、また、景範が新古今集の註訳の中で排仏的言辞を示してゐるが如き、いづれもそのことを物語ってゐるのである。また、その学風が文献学的であり、実証的であり、忠実なる本文解釈に立論の根拠を置かうとすることも、その共通する特色である。このことは、懐徳堂の漢学の一大特色であるが、それの学風をまた和学にも応用したのである。蘭洲や景範には、また北村季吟や僧契沖の説を祖述したり批判したりしてゐるところがある。また「蘭洲茗話」を読むと、萬葉集の研究に当って詞林采葉集にも眼を通してゐたことが分る。

思ふに、懐徳堂に於ては、蘭洲の和学が学問として一番すぐれてゐる。けれども、今日の古典解釈から見るときは、これらの古典学もあまり参考にならないかも知れない。ただ、われわれとしては、わが古典研究史上に於ける懐徳堂和学の位置づけのためにかつは、また大阪和学の展開とその性格とを究明するために、こ

れら一聯の懐徳堂の和学を調査し研究するの必要に迫られたのである。

なほ、わたくしは、「語文」第三輯「契沖阿闍梨特集号」に、「大阪の和学と契沖」と題して述べた拙文中にも、懐徳堂とその和学とについて触れるところがあった。併読して頂けば幸甚である。

次に、加藤竹里には、前述のほかに源語解、萬葉趨避、勢語通の註等があるといふ。また、やはり懐徳堂系統の人で、蘭洲の教へを受けた人に川井立牧がある。尼崎町の町年寄を勤めた人で、歌学を有賀長伯に受けた人であるが、この人の著述に「日本紀瑣言」「古史和歌通」ある由、大阪人物誌に出てゐる。かういふ書物は、わたくしには未見の書である。博雅の士の高教を得たい。

総じて、われわれ寡聞者の最も困難してゐるのは、研究資料の蒐集調査に当って、その所在を知り得ないことである。公共の図書館や大学の図書館等にある図書は、その目録によって比較的容易に検索し得るのであるが、そこに見出だし得るものは、われらの要求の九牛の一毛に過ぎない。われらの見聞の届かぬところの個人の蔵書中に或は社寺の秘庫等に、有力な資料の蔵せられてゐることが多いと思ふのであって、それの発見は、一に多数の協力によるよりほかはない。大方の同情と協力とをこの機会に悃願する次第である。われわれは、今、大阪の町人学者の和学書を博捜してゐる。

この特集号に発表し得た調査報告のうち、蘭洲の著書については、関西大学教授吉永登氏の絶大なる御同情と御協力とを得てゐる。すなはち、同氏は惜しげもなくその珍蔵の書を貸与せられ、かついろいろと示教を賜はったのである。この機会に厚く感謝の意を表する。

以上を以て本特集号の総論とする。

（科学研究費による研究成果の一部）

——大阪大学　教授——

本誌掲載　横山正氏　論文正誤表

	（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
第五輯	二〇	上	二	謡の……（誤）	歌の……（正）
	二一	下	一一	日蓮記	目蓮記
	二二	下	一九	延寛頃	延宝頃
	二二	下	一九	（舎利）	「舎利」
	二三	上	四	形式類似	形式句類似
	二三	上	七	この段	この後
	二三	下	二三	源七	源六
第八輯	一三	下	一〇	衰	哀
	一六	上	一九	釜打栗	爺打栗
	一六	下	五	鶴山	鷸山
	一八	下	一一	内容	内面